

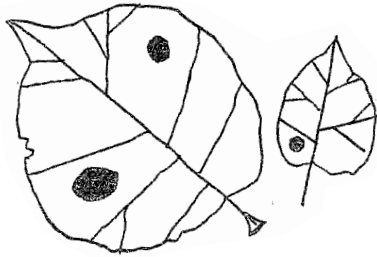
図書室月報

2023年(令和5年)10月5日

第725号

〈講座 参加者の感想〉

—古典への招待— (講師 水島 英己^{ひでみ})



第五回 『万葉集』 を読む を受講して

しょうの たけし
生野 毅 (詩人)

「こちの枝」に寄す

(中略) 木々はなおもざわめき 揺れやまない

飯島耕一『匙』

毎年、詩人の水島英己さんが講師を務める講座『万葉集』を読むの今年のテーマは、「挽歌とは何か」と「万葉集と歴史」だった。まず「挽歌」とは「雑歌」「相聞」と共に『万葉集』を構成する「三大部立(ぶだて・分類の意)」の一つである。「人の死にかかわる歌」のことだが、5月25日の講座初日の冒頭において水島さんは、4月に郷里の鹿児島で父親が98歳で天寿をまっとうし、同月、永年の詩友であり、国立市公民館で詩のワークショップの講師も務められていた詩人、映画監督の福岡健二さんが急逝されたことを切実に語った。その上で水島さんは、「上代(794年の平安京遷都以前の文学上の区分)の葬送儀礼の流れ」を、「遊離魂」が遺体に戻ってきて蘇生するまでの「殯」の期間と、遺体を安置する「殯宮」における儀礼を中心に概説し、それらが天智天皇(中大兄皇子)の「挽歌群」においていかに見出されるかを検証した。第二回においては、柿本朝臣人麻呂や「皇子尊の宮の舍人ども」による「草壁(日並)皇子挽歌」を、「挽歌」特有の手法に留意しつつ精読した。第三回の基調となった「柿本朝臣人麻呂、妻の死にした後、泣血哀慟して作る歌二首 并せて短歌」における「堤に立てる 楓の木 の こちの枝の 春の葉の 茂きが如く 思へりし 妹にはあれど たのめりし 児らにはあれど 世の中を 背きし得ねば かざろひの 燃ゆる荒野に 白たへの 天領巾隠り 鳥じも 朝立ちいまして 入日なす 隠りにしかば」と

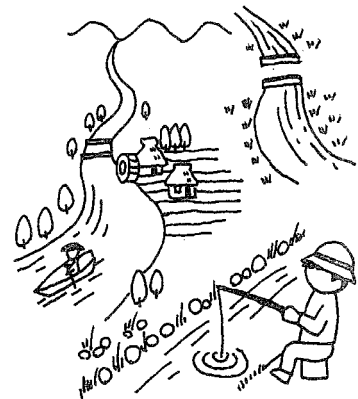
いう長歌の一節からは、亡き妻の絶対的な不在を覆い尽くしてゆくかのように、「こちの枝」(あちらこちらの枝)が、「こちの枝」という言葉の独特な響きもあいまって、「燃ゆる荒野」に無限に枝葉を広げてゆくかのような不思議なイメージを呼び覚まされたが、数年前に夫に先立たれたという常連の受講者の女性が、「泣血哀慟歌」に感銘を受けたと発言したことに胸を衝かれた。「万葉集と歴史」を講じた第四回、第五回においては(前略)ともに、謀反事件で命を落とした二人の皇位継承候補者である(「佛教大学・土佐朋子氏)有間皇子と大津皇子、および、政治の実権を握りつつも自死に追いやられた長屋王といった人々に焦点を当て、歌とその背景の権力抗争の相関を辿って行ったが、いわば辞世の歌として有名な「有間皇子、自ら傷みて松が枝を結び二首」をめぐる、石母田正氏の「古代政治の非人間性と闇黒と、そこにおける犠牲を感性的に認識するための一つの導きの糸」、西郷信綱氏の「作品じたいを歴史や日付からきりはなして扱う」ことは「大地から花をつみとり、乾燥させ、標本帳の押花とするにひとしい」という二人の碩学の主張は、最新詩集『野の戦い、海の思い』(思潮社・国立市公民館図書室所蔵)でも明らかかなように、現代の「政治の非人間性と闇黒」のただ中で、透徹した言葉の「こちの枝」を見出してきた水島さんの詩の営みとも重なるように思われた。6月23日の講座最終日、水島さんは、今日は「沖縄慰霊の日」であると強調しつつ、大伴家持への時空を超えた「挽歌」というべき自作詩『高田の野』を朗読して幕を閉じた。

〈図書室のつどい参加者の感想〉

本田創著

『水のない川 暗渠でたどる東京案内』

五十嵐 剛



天神下を右へ折れ、城山を抜けてママ下へと通じる、小川に沿った径は、子連れの鴨やカワセミが姿を見せる、お気に入りの散歩路です。この講演のことは、古民家前の掲示板で知りました。暗渠を辿ることが、散歩や街歩きの手切り口として注目されているようです。暗渠とは、蓋で覆い、埋設された地下の水路ですが、そもそも国立では見かけないため、注目する理由もピンときません。

講演のはじめに、「暗渠スケープ」という言葉で、特徴的な痕跡が例示されました。蛇行する幅広の遊歩道(立川市の栄の緑道)、連続するマンホールや道に突き出た排水管、猫に心地良い苔むした路地、道に残る石橋の跡など、これまで住んだ街では見かけた景色です。他にも、米屋、染色屋、銭湯といった水辺に縁が深い職業の痕跡が残っていることもあるようです。この暗渠を含む周辺の景観は、水路が、求められた役割を終え、水が枯れ、埋め立てられた後でも、地域の成り立ちや、今に至る生活の歴史を伝えていきます。本田先生が綿密なフィールドワークで探しあて、失わ

れた地理空間を再現し、時間軸で盛衰を辿る、東京各地の暗渠の成り立ちは、どれも興味深いものでしたが、なによりも国立(谷保)と府中を対比した話に引き込まれました。

江戸・東京の用水には五つの水路パターンがあり、国立(谷保)・府中では多摩川から取水し、複雑に分岐して、広く田畑を潤した水を、また多摩川へと帰す、拡散・収束タイプが採られています。この用水網も、都市化につれて需要が減り、時間と共に暗渠の景観が増えていきます。開発が先行した下流の府中では、用水の暗渠化が進み、敷設が間に合わなかった下水道の代用として家庭・工業廃水を受け入れることもあったようです。対する谷保は、都市化の時期が遅れた分、下水道敷設が進み、散在する田圃へと水を届ける、懐かしい開渠の景色が府中よりも残ることとなりました。いつもの散歩路にも暗渠の景色はありました。ヤクルト本社前の用水は、道に飲み込まれ消えています。この暗渠には、ゴミが詰まりにくいヒューム管が敷設され、車道の下を流れた先でまた用水路を表に再現し

ています。昔はここで、用水が五差路にわかれたとか、ウナギが取れたとか、新田義貞ゆかりのヤゴロ島なる古戦場(?)があつたとか、土地の方から聞きました。先を歩くと、下水を雨水と区分して流していることがわかる、連続したマンホールの蓋。そして、散在する、どの一枚の田圃にも、流れが行き付いているのを確認し、なぜかほっとしました。

一方、天神下を左に折れた、蛇行する小路の先は、金属蓋の仮設の暗渠。草深いあたりに、厚板で塞ぎ止められた分水堰があり、「府中へ水が必要です。止めないで」と国立市の張り紙。水争いの記憶と共に、暗渠の景観が始まっているようです。

散歩道の周りには年々住宅が増えています。飲みそうなきれいな水が濁り、カワセミは昔話となり、用水に蓋がされるのも、遠い先ではないかもしれませんが。暗渠の景観を探るのは興味深いことですが、悲しいことに違いはありません。せめて孫の記憶に残るころまで、開渠の流れに沿って元気に散歩ができればと願っています。

(山川出版社)

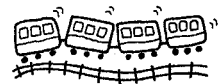
新着図書から

〔総記〕	読んで旅する海外文学	重松理恵(大月書店)	019
〔哲学〕	いくつもの砂漠、いくつもの夜	鶴飼哲(みすず書房)	114
〔歴史〕	沖繩の生活史	石原昌家監修(合同出版)	219
	戦後沖繩史の諸相 齋木喜美子編著(関西学院大学出版会)	219	
	朝鮮戦争無差別爆撃の出撃基地・日本 林博文(高文研)	221	
	デミーンの自殺者たち エマニユエル・ドロア(人文書院)	234	
	ロシア史 上・下 和田春樹(山川出版社)	238	
	マイノリティの星になりたい 李大佑(明石書店)	289	
	詳しい地図で迷わず歩く奥多摩・高尾500Km	佐々木亨(山と溪谷社)	291
〔社会科学〕	モダン東京地図さんぽ	和田博之(風媒社)	291
	東アジア理解講座 金光林編著(明石書店)	302	
	渡辺治著作集 第10巻 渡辺治(旬報社)	308	
	政治って、面白い! 三浦まり編著(花伝社)	314	
	日本の人種主義 河合優子(青弓社)	316	
	外国籍だと調停委員になれないの?	日本弁護士連合会編(生活書院)	327
	入管を問う 岸見太一(人文書院)	329	
	世界の移民歴史図鑑 フィリップ・パーカー編(原書房)	334	
	男性育休の社会学 中里英樹(さいはて社)	366	
	妾と愛人のフェミニズム 石島亜由美(青弓社)	367	
	女らしさは誰のため? ジェーン・スー(小学館)	367	
	エンタイトル ケイト・マン(人文書院)	367	
	「助けて」と言える社会へ 大沢真知子(西日本出版社)	368	
	私が私として、私らしく生きる、暮らす	河合明子(クリエイツかもがわ)	369
	原発災害と生活再建の社会学	庄司貴俊(春風社)	369
	災害の記憶をつなぐ	大学女性協会編(すびか書房)	369
	共生社会への教育学	岡田敬司(世織書房)	371
	性の学びが未来を拓く	水野哲夫(エイデル研究所)	375
	挑戦する教室	中村寛大(武久出版)	375
〔自然科学〕	ビジュアル天文学史	懸秀彦(緑書房)	440
	わかりやすい省察的实践	三輪建二(医学書院)	492
	男尊女卑依存症社会	斉藤章佳(亜紀書房)	493
	「食べてはいけない」「食べてもいい」添加物	渡辺雄二(大和書房)	498
〔工業〕	増災と減災	鈴木猛康(理工図書)	519
	毒の水	ロバート・ピロット(花伝社)	519
	スパイスの可能性	古積由美子(旭屋出版)	596
〔産業〕	世界の食・農林漁業・環境1	池上甲一編著(農山漁村文化協会)	610
〔芸術〕	武蔵野わがふるさと	田沼武能(クレヴィス)	748
	カテリーナの伝えたい5つのこと	カテリーナ(ナイデル)	762
	園井恵子	千和裕之(国書刊行会)	772
〔文学〕	鏡花文学賞50年	五木寛之(北國新聞社)	910
	青の国、うたの国	俵万智(ハモニカブックス)	91た
	緑歌	河津聖恵(ふらんす堂)	911か
	森の赤鬼	北沢彰利(信濃毎日新聞)	930
	マナーの娘たち	デイーマ・アルザヤット(東京創元社)	93ア

〈文学と地域〉

講座の詳細は公民館だより9月号をご覧ください。

中央線沿線の文学風景—小説のなかの町を歩く—



講師 矢野 勝巳 (沿線文学研究者・元三鷹市山本有三記念館館長)

地域の身近な風景を文学作品を透して見つめてみませんか? 今回は、太宰治や瀬戸内寂聴、村上春樹や又吉直樹など、多くの作家に縁のある井の頭公園や三鷹駅周辺を中心に作品と風景の新たな魅力を味わいます。

講座参考図書

- * 文学する中央線沿線—小説に描かれたまちを歩く…………… 矢野勝巳 (ぶんしん出版)
- * 郊外の文学誌 …………… 川本三郎 (新潮社)
- * 郊外の記憶—文学とともに東京の縁を歩く …………… 鈴木智之 (青弓社)
- * それは誠 …………… 乗代雄介 (文藝春秋)
- * 抱く女 …………… 桐野夏生 (新潮社)
- * 場所 …………… 瀬戸内寂聴 (新潮社)
- * 劇場 …………… 又吉直樹 (新潮社)

図書室のこころ

ムラブリ

—文字も曆も持たない狩猟採集民族から
言語学者が教わったこと—

お話 伊藤 雄馬 (言語学者)

ムラブリとはタイやラオスの山岳地帯に住む少数民族です。また、その言語はユネスコから話者のいなくなる可能性のある「危機言語」に指定されています。大学の授業でムラブリ語と出会った伊藤さんは「この歌うような響きの美しい言語を話せるようになりたい」とムラブリ語を研究し続けてこられました。また同時に、ムラブリの時間や場所、金銭にとられない自由な生き方に、これまで「当たり前」と思っていた価値観を大きく覆されていったそうです。ムラブリとその言語について知るとともに、伊藤さんご自身がムラブリと出会って変化していった考え方やライフスタイルについてもお話しいただく機会とします。

〈伊藤さんの本〉表題作 (集英社インターナショナル)、
『人類学者と言語学者が森に入って考えたこと』
共著 (教育評論社)

とき 10月21日(土)

昼2時〜夕5時

ところ 公民館 地下ホール

定員 60名(申込先着順)

申込先 10月11日(水)朝9時〜

公民館 ☎(572)5141

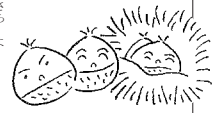


私の本棚から 第1回

チョン・セラン著 斎藤真理子訳

『フィフティ・ピープル』

山下 幸代



5年前から、韓国語を学び始めました。教室で、友人より、お勧めの映画やドラマ、そして本も紹介され、ずいぶん沢山の作品に出会うことが出来ました。本では、どちらかというときまだ若い女性作家のものに強く心惹かれました。日本人の私が共感出来るものをあちこちで読み取ることが出来るのです。きっと韓国と日本では、歴史的に似通った家族関係、人間関係があり、日本よりさらに強い問題意識を韓国の女性達は持っているように感じました。中でも、チョン・セラン著『フィフティ・ピープル』は印象深かった作品の一つです。

この本の舞台は、大きな病院がある、ある都市に住む50人が主人公になっています。幼い小学生から70代の医師まで、それぞれ一つの物語になっています。ページ数で言うと一人、5ページから10ページほどの話なのですが、一つだけ読んでも、しっかりと物語として説得力があります。しかし、次の物語を読み進めていくと、前の話に登場した人物らしい表現や、名前があったりして微妙に人物の交差があり、思わず相関関係図を作りたくなり、楽しかったです。病院も大切な舞台ですので、病む人、心傷付く人も出てきますが、みんな何かの悩みをかかえながらも、互いに行きかい、支え合う姿に心慰められます。一番最初に登場したのは、ソン・スジョン。しかし、

本当の主役は彼女のお母さん。娘と一緒に病院を受診したところ、がんの転移のため、余命がほとんどないと告げられる。お母さんは、それを聞くと、ものすごい勢いで娘、スジョンの結婚準備を早め、最高の式にするために全力を出す。「私ね、がんが転移しましてね。もうすぐ死ぬの。」と言いながら。そして、式当日、お母さんは、式場の入り口で、お母さんのために盛装の限りを尽くしてかけつけてきた友人の輪の中で、美しいチマ・チョゴリで、まるで舞踊を踊るように美しく一回転してみせた。娘のスジョンはそれを見て、結婚式のふりをしたお葬式だ、素敵なお葬式だと思っう。

この物語を読んで、私は、韓国のお母さんを生きて生きたい浮かべることができました。情が深く、我が子のためなら、どんなことでもやっつてのける元気一杯のおモニのことを。

(亜紀書房)

くにたちブッククラブ

—記憶の欠片をひろい集めて—

村上春樹『女のいない男たち』

(文春文庫)

講師 深津 謙一郎 (共立女子大学・日本近代文学)

とき 10月12日(木) 夜7時半〜9時半

ところ 公民館 地下ホール

申込先 公民館 ☎(572)5141

*次回は11月9日(木) 今村夏子『むらさきのスカートの女』(朝日文庫)です。

